JOSHIBI no.176

岩城南海子

明るく、楽しみながら、がむしゃらに。

運を味方につけられる人と、つけられない人。二種類がいるとしたら美術監督として活躍する岩城南海子さんは、まちがいなく前者だろう。持ち前の明るさとバイタリティ、高い志をもって、これまで運をたぐり寄せてきた岩城さんの足取りに迫る。

Photo 池田晶紀　Text 立古和智

私はいつも運がいいんです。女子美生だったときに「映画を撮りたい」と思っていたら、この世界に飛び込む機会が得られて、今に至るわけですから。当初は何が美術の仕事なのかも理解していませんでした。それなのに先輩から「今後、美術でやっていくか?」と聞かれて「はい」と答えたら『うなぎ』の美術監督である稲垣尚夫さんの元で助手をさせてもらえることになったのです。そこでの4年間は厳しく、大変でしたが、私の基礎となっています。そもそも美術とは、映画における世界感づくりを担うポジションで、具体的には美術監督が平面上に描いた世界を、スタッフとともに形にしていくことが主な仕事になります。映画の美術部には細かな部分を手がける装飾部や、セットを担当する大道具もいますが、美術監督の仕事は絵的なこと全体を統括すること。その仕事の醍醐味はといえば、平面上にデザインした世界が立体になる

ことと、そこを舞台にお芝居が行われること。ここに役者が入ってくる、こんな動きをする、だったら机はここだ――。デザインする際には、こういった光景を頭に思い浮かべるのですが、実際に撮影されたものが作品として世に出ると感涙ものです。仕事によって築き上げる世界感が異なってくることも、毎回楽しみな部分ですね。

一方、大変なのは予算の枠内で、最良の表現を模索すること。予算だけでなく技術的にも実現が難しい場合があるのも確かですが、萎縮ばかりしていてはつまらない。だからデザイン画は「本当に実現できるの?」というギリギリの線を狙って描きます。結果、実際につくる段階になって慌てることもしばしばですが、自分には「大丈夫、大丈夫!」と言い聞かせ、周囲の協力を得ながら実現へと導くのが私のスタイル。

冒頭で「私は運がいい」とはいったものの、美術の現場って大変ですから後悔したことも多々あります。今でこそなくなりましたが、かつては助手が怒鳴られるのは当たり前、小突かれることすらありました。何よりキツイのは寝られないことや、休みがないこと。それだけ過酷だと、多くの人が続かず辞めてしまうのも納得です。私も駆け出しの頃は常にうまくできない悔しさを感じていました。同時に、これを越えた先に何かあるという思いを抱きながら、がむしゃらに打ち込んできました。10年以内に美術監督になって諸先輩に肩を並べたいという目標もありましたしね。我慢を押しつけたくはないものの、目標さえあれば多くの困難は乗りこえられるものだと思います。

実際のところ、キャリアをスタートして10年目に転機は訪れます。あるプロデューサーから「美術監督をやらないか」と打診されたのです。それが蜷川実花監督の時代劇『さくらん』でした。声をかけられた時点では詳細は聞いていなかったので、蜷川監督の作品と知ったときには、重圧で逃げ出したくなったほどです。けれども、あれほど美術が全面的に主張できる映画も珍しいですし、史実をベースにしながらとはいっても、思いっきり自由に発想することを求められた仕事でしたから、やりがいは本当に格別でしたね。

振り返ってみると、私は助手の頃から、どんな現場でも「楽しんでやろう」と努めてきた気がします。結果として、これまで色んな人から拾われながら、制作現場を渡り歩いてこられたのですが、私が美術監督になって声をかけたくなる相手というのも決まって明るく自然体で頑張っている人。そういう人に目が向きます。そんな若い人の中には、自らアクションを起こして、この世界に飛び込んでくる人も珍しくはありません。本当にやる気がある人ってそういうもの。それに10年前に比べると女性もすごく増えました。女性が重たい荷物を運ぶ風景にも今や驚きませんからね。むしろ女性のほうが男性よりも根性があっていいかも(笑)。

私もまだまだいろんな作品に関わりたい。映画はもちろんCMもやりたいし、もっと海外ロケだって経験したい。チームでひとつの作品を形にしていく過程や、完成したときの達成感って、やはり他には代えがたいものなのですよね。

岩城南海子

1996年、女子美術大学短期大学部造形科生活デザイン専攻を卒業。美術監督の稲垣尚夫氏の助手を4年間務めた後に独立。キャリア10年目に蜷川実花監督の映画「さくらん」(2007)で美術監督としてデビュー。近年携わった映画には「ひみつのアッコちゃん」、「こちら葛飾区亀有公園前派出所 THE MOVIE～勝どき橋を封鎖せよ!～」「洋菓子店コアンドル」のほか、2014年春に公開される実写版「魔女の宅急便」などがある。

アートは簡単ではない。だからこそ面白い。

第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展で、卒業生の蔵屋美香さんがキュレーターを務めた日本館が、特別表彰を受賞した。さまざまな経験を生かすことでキュレーターとしての成功をつかんだ女子美の先輩に、アートの魅力や、これまでの足取りについて聞いた。

取材・文　立古和智　写真　MIHO

アート界で最も権威のある展覧会のひとつ、ヴェネチア・ビエンナーレ。ここで日本館が特別表彰されるのは今回がはじめてで、文字通りの快挙である。アーティストの田中功起さんとキュレーターである蔵屋さん、二人が作品を通じて表現したものは「東日本大震災の経験を他者と共有することは可能か」。震災を直接的に描くのではない。大勢の人が階段を上り下りしたり、9人の美容師が女性の髪をカットする模様をとらえた映像作品などを用いることで、この一大テーマに挑戦。そんな蔵屋さんにとって優れたアートとは？

「まず造形的にしっかりしている作品。そして、そこから発せられるメッセージが複雑なもの。アートは簡単なものではありませんが、作品を理解するプロセスを通じて、他者の考え方を知ることができるのも、その楽しみのひとつです」

明快なメッセージを投げかける蔵屋さんだが、学生時代には洋画を専攻するも、制作には没頭できずにいた自称「落ちこぼれ」。当時は図書館にこもり、小説や美術の理論書を読みふける、典型的なモラトリアムの時期を送った。

「何になれるのか見当もつかず不安でした。とはいえ当時の経験は、何ひとつ無駄にはなっていない。少なくとも学生時代に創り手を経験していることは、現在の仕事で強みになっている」

作家の立場に思いを寄せられるのは、女子美での経験があってこそ。たくさんの本に触れてきたことは、後に美術を評論する方面に向かう素地となった。イギリスに短期滞在した経験は、現在の国境を超えた活動に欠かせない英語力の土台に。そう語る蔵屋さんにとって、キュレーターとしての喜びとは。

「自分で考えたテーマにのっとって、実物の作品を空間に編集し、プレゼンテーションできること。実物は図版に比べて情報量が格段に多く、私の考えを裏切るメッセージも発する。観客を誤読へと誘うが、それもOK。むしろ私以外の解釈も成り立つから面白い」

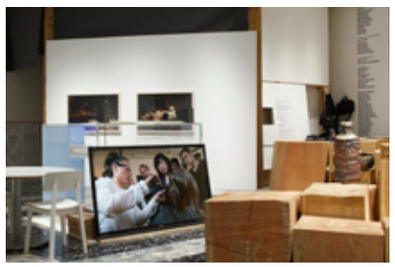
ときにアートは悩ましい存在だ。わかりやすさや楽しさばかりが求められがちな時代に逆行して、一朝一夕に読み解けるほど柔ではない。しかし歯ごたえがあるからこそ味わい深く、時間をかけて味わうものだから、時を経てかけがえのない存在へとなっていく。

「落ちこぼれの女子美生がアートから離れなかったのはなぜですかね。少なくとも先生たちは私のような学生でも長い目で見守ってくれたんですよね」

蔵屋 美香

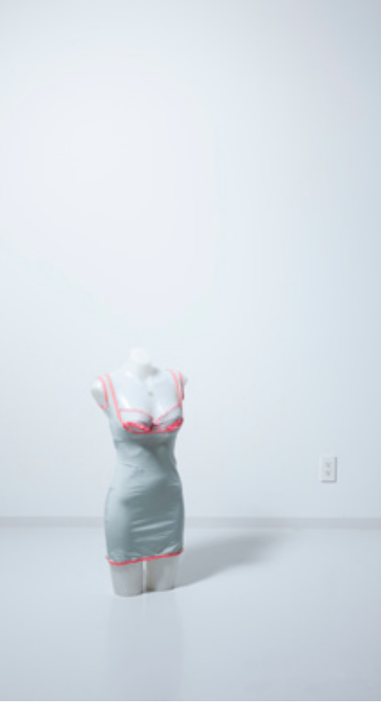
東京国立近代美術館美術課長。女子術大学芸術学部絵画学科洋画専攻卒。千葉大学大学院修了。主な企画に、『ヴィデオを待ちながら―映像、60年代から今日へ』(2009年、東京国立近代美術館、三輪健仁と共同キュレーション)、『寝るひと・立つひと・もたれるひと』(2009年、同)、『いみありげなしみ』(2010年、同)、『路上』(2011年、同)、『ぬぐ絵画 ―日本のヌード 1880-1945』(2011-12年、同)。主な論考に『麗子はどこにいる？ ―岸田劉生 1914-1918の肖像画』(『東京国立近代美術館 研究紀要』第14号、2010年)

東京国立近代美術館にて。背後の作品はイサム・ノグチ『門』(1969)



ヴェネチア・ビエンナーレ日本館では、9本の映像作品と、9つのプロジェクトに関する写真が展示された。いずれも人々がある課題に対して協働作業を行う様子を捉えたもの。震災後の社会を作るにはどんな協働作業が必要かを考えるための、いわば「たとえ話」として受け取れる作りだ。

撮影：木奥恵三



ファッションの未来に迫る産学協同でのアクション。

大学と社会とが手を組むことで新しいものを生みだす産学協同プロジェクト。本学ファッションテキスタイル表現領域が、株式会社ワコールや郵便局とともに手がけた作品たちは、いずれも衣服の未来に迫るものだ。これら取り組みを紹介する。

取材・文　立古和智　写真　渡辺一城

身体を守る。アイデンティティを映し出す。それ以外の衣服の価値とは何なのか。その解となる可能性を秘めているのがファッションテキスタイル表現領域が進めてきたプロジェクト。なかでも大きな期待を寄せられているのがワコールとのコラボレーションだ。小倉文子教授は、ここでの意義を「既成概念にとらわれないもの作り」と説く。

「ワコールとは“共生”をテーマに、学生の伸びやかな感性を生かした自由なものづくりを試みました」(小倉)

「共生」から派生する形で添えられたのは「内と外」「際」「社会とのつながり」という3つのキーワード。身体、インナー、アウター、各々には「内と外」があり、それぞれが接する面には「際」がある。そしてアウターの外側に通じているものは「社会」。これらを一旦ていねいに受け止めた上で、学生10人はインナーとアウターが「共に生きる」デザインと対峙することに。

「辞書で共生の意味を調べることが出発点。最初は頭を抱えましたが徐々にインナーの必要性、衣服の存在意義などを掘り下げる結果になりました」

「社会に求められるものを意識してデザインするのは大前提。その上で、ワコールからは生まれてこないユニークなデザインをめざしました」(学生)

デザインに使用するボディや、必要となるすべての素材は、ワコールが惜しみなく提供。それに背中を押されながら学生のクリエイティビティは、見事に花開く。百花繚乱なアウトプットは「10のブランドの誕生」といった趣だ。

一方「幸せのきっかけを組み込んだ衣服をツールに、社会を変える」というミッションを掲げる大学院2年生、横井理子さんの「ふくてがみ(左下図)」は創り手である彼女からの呼びかけに応じる形で、横浜・柿の木台郵便局とのコラボレーションがはじまった。

「作品づくりではなく、社会を良くすることが第一義。社会と関わり合うとなると大きな責任がともなうし、最後まで大きな緊張感があった」(横井)

衣服は単なるモノではない。むしろ衣服からコトを起こすデザインこそが本科の標榜するところ。そういった姿勢を色濃く映し出したこれらプロジェクトは、衣服に秘められた可能性を問う。

「デザインしたら終わりではなく、その先に起こるものを含めてデザインすべき。そこまでトータルで考えられる人たちに育ってほしいですね」(小倉)

ふくてがみ

便せん柄のシャツの内側に、ボールペンなどでメッセージを綴ることができ、折りたためば実際に郵送できるシャツ。受け手はこれを着ることによって、手紙を書いてくれた人の思いを身にまとい幸せを感じることができる。それをきっかけとして、社会にポジティブな影響を与えることがコンセプトの作品だ。

女子美×東工大 ペリパトス・オープンギャラリーが誕生！

3月5日、本学大学院美術研究科と東京工業大学大学院総合理工学研究科は、両研究科における連携・協力及び教育研究活動の一層の充実と質の向上と学術の発展と有為な人材の育成に寄与することを目的とし連携・協力に関する協定を締結いたしました。

この連携・協力の一環として、東京工業大学のすずかけ台キャンパス（横浜市緑区）に新たに建設された高層棟3階エントランス回廊とキャンパス内屋外スペースに「ペリパトス・オープンギャラリー※1」が誕生。本学学生等※2の作品がギャラリーを彩っています。3月22日には両学の学長及び研究科長出席のもと、オープニングセレモニーを開催。東京工業大学の三島良直学長や内川惠二研究科長をはじめとする先生方より、若手アーティストを奨励するために設けられた学長賞や研究科長賞などの各賞が出品学生に対し授与されました。

※1
「ペリパトス」という名前は、すずかけ台キャンパスの象徴である「ペリパトスの研杜（けんと）」から名付けられました。「ペリパトス＝Peripatos（英語ではPeripatetic）」とは、ギリシア語で散策路、遊歩道という意味。アリストテレスが開いた学園には、ペリパトスが張り巡らされ、そこを歩き回り論議したというアリストテレスの弟子たちは「ペリパトス学派」と呼ばれました。

※2
絵画作品は、大学院美術研究科修士課程美術専攻および芸術学部洋画専攻、日本画専攻の学生作品、立体作品は、同大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域修了生作品、計11点を展示。

芸術は人間を清め高める力を秘めている 大村 智理事長、絵画による“薬効”を講演

韮崎大村美術館と本学の相互協力協定締結の5周年を記念した展覧会「韮崎大村美術館収蔵作品展－女流画家の歩み－」の開催に伴い、6月27日、相模原キャンパスにて大村智理事長・韮崎大村美術館館長の講演会が行われました。「私と美術との係り」とのテーマのもと、幼少期における美術との係りの始まりや、1989年に創設した北里研究所メディカルセンター病院（現 北里大学メディカルセンター）において、日本で先駆けとなったヒーリングアート事業の開始などについて触れ「芸術は人間の心を癒し、その癒しこそが人間を高めていく」ことを実感した話をされました。また韮崎大村美術館の収蔵作品は、いずれもかけがえのないものばかりではあるものの、なかでも作家との交流が印象深い片岡球子先生作の《面構 烏亭焉馬と二代団十郎》のエピソードを語られ、大村理事長ならではの語り口に笑いもおこるほど。そして天然物有機化学の研究者として、また本学理事長として「絵画を目にすることで、いかなる薬にもまして心が静まり安らぐ」ことをお話になり、会場から大きな拍手がおこっていました。

片岡球子《面構 烏亭焉馬と二代団十郎》1994年

森田元子《緑衣》1933年

佐野ぬい《オペラ・ノート》1933年

三岸節子《花 軽井沢にて》1962年　©MIGISHI

女子美生、奥村靫正教授の講演会に大集結

6月7日、相模原キャンパスで学友会主催のデザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻、奥村靫正教授の講演会が行われました。少しでもいい場所で、お話を聞きたいと開演前から、会場はヴィジュアルデザイン専攻以外のたくさんの学生が集まり早くも熱気があふれるほど。この講演会では、5月7日〜5月31日に銀座のクリエイションギャラリー、ガーディアンガーデンの2ヶ所で開催された奥村教授の個展「第二回奥村祭り」の展示作品の説明や、今まで関わってきたアーティストとの秘話などが語られました。

20代、ロックに触発され、音楽のヴィジュアライズを表現し続けてきた奥村教授。数多く手掛けた作品の裏話も、いろいろ披露してくださいました。なかでも、アメリカの50's スタイルにこだわり、リーゼントに革ジャンというロカビリーファッションで九州から上京してきたロックバンドに、独特のヘアスタイルとチェック柄の服を着させた「チェッカーズ誕生秘話」には、リアル世代ではないにもかかわらず学生たちは目を輝かせながら聞き入っていました。また、アートディレクターを担当したYMO（Yellow Magic Orchestra）の1981年のツアー用の舞台美術映像も特別上映。20パターンもの光の変化からなる斬新な表現に、学生たちは驚きを隠せませんでした。奥村教授のつくりつづけることへのあくなき追及心を知ることができたこの講演会。きっと多くの女子美生の制作意欲に、火をつけたことでしょう。

夏を彩る 女子美生のてぬぐい 再び、伊勢丹へ

「女子美のてぬぐい、今度はいつ販売されますか?」との問い合わせがあったほどの2012年「b・tanぬぐい展」。好評により今年も伊勢丹新宿店（本館7階 中央エスカレーター脇特設会場）にて「b・tanぬぐい展」が7月24日から8月6日まで開催されました。b・tanぬぐいプロジェクトとは、大学の授業の一環として立ち上がった「B反手拭プロジェクト」によるものです。注染工場の制作過程の中でわずかな織キズ、染ムラなどから規格外とされた注染布＝B反を、女子美生のデザインによって新しい形によみがえらせ、製品化を図る活動を続けています。今まで処分されていたB反を「もったいない」の心から再生させるプロジェクトですが、やはり現代に合うデザインでなければ製品化もかないません。実際「b・tanぬぐい展」で販売されている商品も「プランを10個以上提出させても、製品化されるのはひとつあるかどうか」と、話すのはプロジェクト担当の大澤美樹子先生。けれども「昨年、サウナガウンを購入されたお客様が今年もお見えになり“とっても良い物だったので、今年も買いに来た”と言ってくださった」とのこと。b・tanぬぐいのよさが、着実に伝わり広まっています。

デザインから制作を担当した学生は、接客も担当。「デザインから販売までの一連の流れを学べる機会はめったにありません。接客を経験した学生が“丁寧に接客すると自分までが清らかになった感じがする”と話してくれたことがいちばん嬉しいですね」と大澤先生。「b・tanぬぐい展」で商品を購入したお客様がリピーターになってくださり、より本学への興味をもっていただくことこそがこのプロジェクトの目標。今後の継続に期待が寄せられます。

つりしのぶ
「ドリームキャッチャー」
大学院メディアアート造形研究領域Ⅰ年
アリソン・ロックス

江戸風鈴
「夏色・夏空・コバルト色の夏」
プロダクトデザインコース3年
田村 文

つりしのぶ「雫」
ヒーリング表現領域Ⅰ年
七海陽子

江戸扇子「金魚(彩り・黒)」
ヴィジュアルデザインコース2年　浅見真帆

漆芸「風車」メディアアート学科4年　片桐未来

風鈴の音色、つりしのぶの藍緑…女子美デザインの伝統工芸が涼味を呼ぶ

7月26日から28日まで、吉祥寺PARCOにて「女子美×えどがわ伝統工芸」が開催されました。この企画は「えどがわ伝統工芸プロジェクト※」の一環として行なわれ、吉祥寺PARCOの特設会場ではスタッフと共に、学生も販売を担当しました。「午前中に店頭でリーフレットをお渡しした方が、午後に戻って来て下さって商品を購入してくれました。商品の魅力が伝わっていることが実感できて嬉しいです」。そう話してくれたのはアート・デザイン表現学科メディア表現領域3年の飯田ひとみさん。プロジェクトに臨む際、学生たちは伝統工芸の持つかたいイメージをなくし、自分たちと同世代にも伝統工芸のよさを実感してもらいたい、とiPhoneケースやピアスを提案し製品化。「同世代向けとして販売していましたが、実際に購入されたのはいろいろな年齢層の方々でした。なかには同じものを複数購入して、友人への贈り物にしてくださる方もいらっしゃいました」。

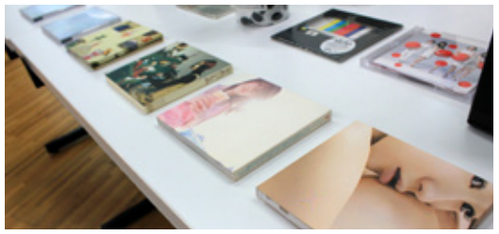
一方、企画運営者である吉祥寺PARCO営業担当の大石良彦さんは「最近の若い世代の方は、本質を見抜く力がある」と力強く話してくださいました。「えどがわ伝統工芸プロジェクトの商品は表面だけではなく、奥深さからくるもののよさを感じます。全て一点ものの手作りであることも、非常に魅力的な要素です」とのこと。女子美生のいきいきとしたデザイン力とPARCOの情報発信力により、世代を越えて伝統工芸の魅力をより身近に伝えることができた本企画。2013年度の新作発表は、1月、来年の夏も女子美生デザインの伝統工芸を目にするのが楽しみです。

※江戸川区の伝統工芸職人と女子美生が連携し、新しい伝統工芸製品を開発、製品化するプロジェクト。2008年には新領域（先駆的・実験的なデザイン活動）にてグッドデザイン賞を受賞。

※学生の所属学科名ならびに学年は、制作年次のままの表記です

ヴィジュアルデザイン専攻 夏の集中講義開講！
北山雅和×木村豊「音楽とデザイン」についておおいに語る

7月25日、相模原キャンパスで本学ヴィジュアルデザイン専攻主催、夏の集中講義「音楽とデザイン」が開講されました。講師として、デザイナーの北山雅和先生と木村豊先生を招待。同専攻長崎訓子准教授の司会のもと対談が行われました。この講義は学外の方も参加可能のため、会場には本学学生の他たくさんのファンの方で大変な賑わい。そんななか、レコードが大好きで定期的にDJをされているという木村先生が、会場にアナログ盤専用のプレイヤーを持参。集中講義は、心地よいBGMに包まれながら進められました。北山先生のお話のなか、思い出深いジャケットとして挙げられたのはフジファブリックの『MUSIC』。レコーディング終了直前にボーカルの志村正彦さんが急逝。ジャケットはメンバーの写真を使用せず新しくロゴを作るアイデアに。けれど北山先生自身はファンがそれを喜んでくれるのかと不安に悩まされたそうです。結果、亡くなられた志村さん愛用のギターを撮影しロゴと組み合わせることで、ジャケットデザインが完成。「志村くんのことを知れば知るほど悲しみがこみあげてきて、本当に大変な仕事だったけれど思い出深い作品になった」と話されていました。「iTunesなどのダウンロードが主流の今、CDジャケットデザインを手掛ける側として意識していることは?」という学生からの質問に対し「音楽に限らず全てのものからヴィジュアルがなくなることはない。アイコン化され、小さくなってもわかりやすく目立つものが求められている。そこを気をつけて制作していきたい」と木村先生。北山先生は「メディアが変わっていくことは仕方のないこと。けれどジャケ買いをしてくれる人が少しでもいる限りデザインに全力を注ぎ、なんとしてでもメディアを残していきたいと思っている」と熱い思いを語ってくださいました。今回の講義で感じたものは、おふたりの制作に対する熱意。全力で仕事に取り込む姿勢に「ほんとうに胸が熱くなりました」と出席した学生も話していました。



北山雅和（写真 左）

1967年生まれ。兵庫県神戸市出身。デザイナー。桑沢デザイン研究所卒。コンテムポラリー・プロダクションを経て1998年にHelp! 設立。コーネリアス、秦基博、フジファブリックなどのCDジャケットデザインを中心に、現在はTV番組の映像作品のディレクションも手掛けている。

木村 豊（写真 右）

1967年生まれ。東京都出身。日本デザイナー学院卒。1995年にCentral67を設立。スピッツ、SUPERCAR、椎名林檎、木村カエラのCDジャケットを中心にミュージックビデオの監督やツアーグッズ等のデザインを手掛ける。

女子美生の作品が「ボーノ相模大野」を演出

3月にグランドオープンした複合施設「ボーノ相模大野」で、女子美生の作品が展示され好評を得ています。なかでも屋外のフロアに設置されているベンチは、学生らしい発想から生まれた独自の形状により利用者からも注目されています。これらのベンチは、市民参加型の地域宣伝団体である「相模大野宣伝部」が主催した「デザインベンチプロジェクト」で優秀賞に選ばれ、製品化されたものです。プロダクトデザイン専攻4年西根詩音さんがデザインしたベンチ『ひらひら』、そして同専攻2年市橋佑奈さんがデザインしたベンチ『波』。どちらも「自分の表現したい形と、座る人の気持ちが両立するデザインを考えるのが難しかった」とか。

利用者の方々からは「景色になじんでいる」「普通のものとはちょっと違う形なので、座るのが楽しみ」などの意見が寄せられているそうです。ベンチの他には屋上庭園「Sag-niwa」と4階の休憩スペースに本学学生の絵画作品も展示。

ベンチと絵画作品を通して、暮らしのなかで気軽にアートと触れあえる空間を演出しています。

アジアから世界へ発信！ドローイングワークを Shanghai Joshibi Art Galleryで展示

本学大学院生ならびに研究生を対象に行った「Shanghai Joshibi Art Gallery Award ドローイングコンペティション」の入選者が決定しました。今回、コンペティション審査員として本学芸術表象専攻の北澤憲昭教授の他、豊田市美術館学芸員の北川智昭氏、練馬区立美術館学芸員の野地耕一郎氏を迎え、審査が行われました。

ドローイングとは描くこと。描くことによって得られること、また反対に消失していくものを確認し、消滅と生成という相対的なの行為の繰り返しこそが、若手作家にとって必要な行為と考え、作品対象をドローイングに限定しました。また同様に、大学院生や研究生を対象にしたのは専門領域の研究と表現を探求しているその成果と、そこから生まれる新たな可能性を上海から世界に向かって発信したい、という思いからです。

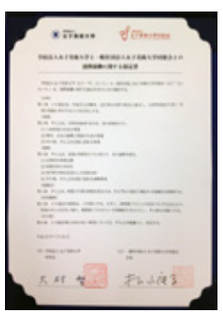
Shanghai Joshibi Art Galleryは、上海のM50という国際的なアートシーンエリアの中心地にあるギャラリー。かつての1970年代のニューヨークのソーホーしかり、北京の798芸術区と共に都市の活性化すらも牽引する「顔」として、まさに世界中から注目中のエリアといっても過言ではありません。このギャラリーは、女子美生、女子美卒業生の作品を独自の視点・プログラムから紹介し、アジア圏から世界へのアートの発信を実践する場として開設されたのです。今回入選した作品は、同ギャラリーで7月20日～8月25日まで開催された「advanced studies project of art 展」で展示されました。

入選者一覧

加藤千晶（洋画研究領域１年）
熊谷真希子（洋画研究領域１年）
坂内直美（洋画研究領域１年）
多良舞利恵（洋画研究領域１年）
二宮瑛梨（洋画研究領域１年）
齋藤杏奈（洋画研究領域２年）
室井麻未（洋画研究領域２年）
伊藤美奈子（日本画研究領域１年）
小田中めぐみ（日本画研究領域１年）
中島詩織（日本画研究領域１年）
平澤咲（日本画研究領域１年）
山村遥（日本画研究領域１年）
大野晴美（立体芸術研究領域２年）

NEWS & TOPICS

01 学校法人女子美術大学と一般社団法人女子美術大学同窓会連携協働に関する協定を締結



7月29日、学校法人女子美術大学と一般社団法人女子美術大学同窓会は、教育、文化等の分野で相互に協力し、人材育成及び文化・芸術の発展に寄与することを目的に、連携協働に関する協定を締結しました。同日、本学杉並校舎第一会議室において調印式が執り行われ、大村智理事長と木下小夜子同窓会会長が協定書に調印しました。大村理事長より、「相互の発展を目指して、協定を締結する運びとなりましたことは誠に喜ばしく、今後はこの協定の理念を踏まえ、諸々の協働事業を行って参りたいと思います。皆さまのご支援、ご協力を宜しくお願いしたい。」との挨拶がありました。木下会長より、「母校が良い人材を社会に送り出すこと、母校の発展を通して同窓会は社会への貢献ができると考えています。協定締結を機に、今後も積極的に連携事業に取り組んでいきたい。」との挨拶をいただきました。調印式終了後、本学関係者及び同窓会役員が大村理事長、木下会長を囲んで和やかに懇談しました。

02 蹂躙、不屈、祈りがテーマ『love＆hate』審査員賞受賞

2010年大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域修了の福本 綾さんの作品『love＆hate』が、「トーキョーワンダーウォール公募 2013」で会田 誠氏による審査員賞を受賞しました。総数880点近い応募の中から、審査員賞受賞者は6名。作品は、東京都現代美術館にて展示されました。福本さんは第19回三菱商事アートゲートプログラムにも選出され、精力的に活動中です。最新情報はこちらで確認ください→ http://fukumoto-aya.jimdo.com/

03 誠信女子大学校との新しい絆 今こそアジア発のアーティスト育成へ

7月30日、韓国ソウル市、誠信女子大学校と本学との学術文化交流協定を締結。その協定に基づく相互協力により、未来のアジア発若手アーティストを育成するためのアワード「アジア高校生アートアワード 2013※」を実施することとなりました。誠信女子大学校と、本学協定校である中国の上海交通大学海派文化研究所と本学の三校による共催となったこのアワードは若手アーティスト育成の他、国際芸術交流の促進も目的のひとつです。
また、新たに本学と学術文化交流協定を結んだ誠信女子大学校の創立者は、本学の西洋画科高等科を1926年に卒業した李淑鍾女史。1936年、卒業生によって創設された誠信女子大学校はいまや、10学部を擁する総合大学となり、なかでも美術大学校(日本の学部に相当)は1000名もの学生が在籍する韓国有数の大学です。今回のアワードを皮切りに、今後は教員研究交流や、協定海外留学生派遣などさまざまな交流を実施する計画に期待が寄せられています。

※日本・韓国・中国の高校生等を対象にしたアートアワード。絵画、鉛筆デッサン、デザインの3部門を設置。上位入賞者には副賞として東京の美術館や博物館、ギャラリーを巡り最新のアートシーンを体験できるツアーつきの本学キャンパスへの招待をプレゼント。入賞作品は、日本・韓国・中国の3カ国巡回展で展示予定。

04 藍色グラデーションの短冊たなびく『カラーハンティング展』

21_21 DESIGN SIGHTの会場を入ると、心地よい風鈴の音色とともに、美しい藍色に染まった短冊がなびく風景が見えてきます。カラーハンティング展でエントランスを飾る作品「夏の音色」。篠原風鈴本舗の江戸風鈴と、デザイン工芸学科・工芸専攻テキスタイルコースの学生たちによるインディゴ染の短冊がかなでる音と色の世界。透明感のある風鈴の音色にふさわしく、5色の藍のグラデーションを染め分けて「水の風景・波」を表現しています。本学デザイン・工芸学科工芸専攻では19世紀にドイツで開発された染料インディゴピュアーを用いた藍がめを1949年から使用。本藍に比べ管理をしやすいインディゴは、工芸科を設立した民芸運動の柳宗悦先生たちが用意したもので、以来60年以上に渡り大切に受け継がれています。
この展覧会ディレクター・藤原大氏は、5月に行われた本学での特別講義「カラーハンティング」で、イメージや思考をかき立てる色の無限の可能性について話されました。言葉と色の関係を読み解く「カラー・ボキャブラリー」と題されたインスタレーションは、この際に実地された女子美生約200名へのアンケートをもとに制作されたもの。共通言語としての新たな色の役割と奥深さを伝えています。本学の展示以外にも「肌色メガネ」や「カラーシューティング」など参加型企画では、まるで色のテーマパークにいるかのように楽しめます。会期は10月6日まで。
http://www.21_21designsight.jp/

09 女子美生こだわりのバスタオル、いやしの湯で大好評

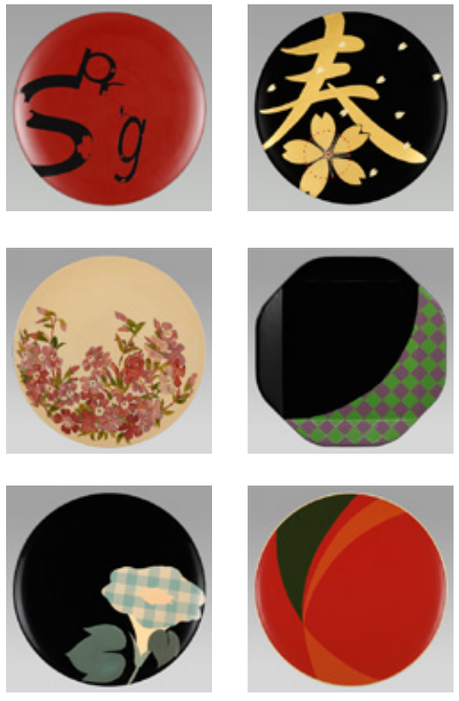
相模原市緑区の青根緑の休暇村いやしの湯から「親しみやすさをイメージできるバスタオルをデザインしてほしい」との依頼を学生デザインルームが受け、ヴィジュアルデザイン専攻4年池尾麻里さんが担当しました。緑豊かな山々と雲、棚田に輝く黄金色の稲穂などをモチーフにしたこのバスタオル、生地や染色にもこだわった一品となりました。期間限定で販売、大変好評だったとのことです。

08 華が咲いた！女子美よさこいの熱い2日間

「女子美、行くよ！」のかけ声で始まった女子美よさこいの踊り。8月24日、25日の両日、原宿表参道や明治神宮、代々木公園などを中心に開催された原宿表参道元気祭 スーパーよさこい2013に、総勢36名のメンバーが参加しました。女子美よさこいの「華を咲かそう女子美生！」の歌詞のように、絵筆やマウスを鳴子に持ち替え一心不乱に舞うその姿に「女子美がんばれ！」の声援がかかるほどでした。

10 震災犠牲者の方々に、会津塗の花を

「若い感性を取り入れ、新たな可能性を広げたい」との思いから、会津塗の塗師や蒔絵師職人の方々から本学に共同制作プロジェクトが提案され、会津塗伝統工芸と女子美生デザインがコラボレーションした漆器皿、約160枚が完成しました。
テーマは「花」。これは、先の震災での犠牲者の方々に「花を手向ける」との思いを込めるため掲げたもの。「花」という言葉から発想された83種類のデザインが採用されました。漢字の「春」「秋」のそれぞれの季節の花をあしらったデザインや、藤や椿といった花のイメージをパターン模様にしたデザインなどを目にした職人のみなさんは「手のひらにのるほどの小さな空間性を感じさせない自由な発想に刺激を受けた。若い力といっしょに制作した作品をひとりでも多くの方に見てもらいたい」と話されていました。
職人の方々が丁寧に絵付けをしてくださった七寸皿（直径約23cm）の数々は、2月に東京ドームで開催された「テーブルウェア・フェスティバル2013 暮らしを彩る器展」に出品販売。売上の一部は被災地支援のために寄付されました。



05 美術教育における学びとは何か？本質にせまるセミナー、開催

8月1日、杉並キャンパスにおいて「美術教育における新たな学びの可能性と課題」をテーマに「美術教育セミナー」が終日開催されました。当日は、小・中学校、高等学校の美術教員や本学の院生、学生など92名の参加がありました。第一部の基調講演では、横浜国立大学教育人間科学部 小池研二准教授から「国際バカロレア（International Baccalaureate）※における美術教育」について、その理念や組織、カリキュラムの紹介があり、「IBについて初めて知った」という参加者の声が聞かれました。グローバル化が進む中で、多文化に対する理解と尊敬を基盤とするIBのカリキュラムでは、芸術科が各教科をつなぐ重要な教科であることなど、改めて我が国の美術教育の在り方を考える機会となりました。午後の第二部では、三つの分科会に分かれ（A分科会「国際バカロレアの考え方を日々の授業に生かすには」、B分科会「生徒の発想や構想の能力を高め、表現につなげる指導〜小さなスケッチブックの中に育つ子どもたちの思考力〜」、C分科会「子どもの成長における『造形遊び』及び『表現活動』の可能性」）子どもの作品を見ながら参加者との活発な意見交換が行われました。

※国際バカロレア機構は、スイスのジュネーブに本部を置き、認定校に対する共通カリキュラムの作成や国際バカロレア試験の実施及び国際バカロレア資格の授与などを行っている。

07 『一路』から伝わる驢馬のこころに秘められた思い

大学院美術研究科修士課程美術専攻日本画研究領域1年、森山千尋さんの作品『一路』が「第63回埼玉県美術展覧会」に入選しました。森山さんは、日本画の領域にとどまらずワタリウム美術館で開催された企画に授業課題として制作したConcrete Poetry※を出品するなど、活動の場を広げています。また今展覧会では、短期大学部卒業生の東田理佐さんの作品『rampant』も埼玉県美術家協会賞を受賞しました。

※具体詩、視覚詩（ヴィジュアル・ポエトリー）とも呼ばれ、文字や色面で表現する形象詩のこと。

06 十一面観音像の微笑み、奨励賞を受賞

短期大学部造形学科1年、栗田恵子さんの作品『悠久』が「第14回日美絵画展」で審査員奨励賞を受賞しました。日本画を描き続けて10年ほどになる栗田さん、仏像を描くのはもはやライフワークとのこと。「大好きな宝生寺の十一面観音像をモチーフにした作品が評価されたことは嬉しい」と話していました。この作品は、国立新美術館で開催された「第14回日美絵画展」で展示されました。

女子美術大学同窓会企画展
アニメーションの世界
ー こどもとおとなをつなぐアート ー

JAM 展覧会報告　PICK UP

2013/4/6(土) → 6/9(日)

本学は、日本のアニメーション黎明期より現在に至るまで、多くの人材をアニメーション業界へ輩出してきました。また、アニメーションの芸術性を追求し、作家として国際的に活躍する卒業生も少なくありません。本展では、このようにアニメーション制作の第一線で活躍する卒業生達を紹介するとともに、こどもの頃よりアニメーションに慣れ親しみ、本学にてアニメーション制作を学んだ学生の作品を数多く紹介し、多彩なアニメーションの世界をお楽しみいただきました。

畳やちゃぶ台を配した「昭和の茶の間」コーナーでは、昭和30年代のアニメーションを上映し、当時の雰囲気を再現しました。また、アニメーション制作現場も再現、制作メモや絵コンテ、セル画の展示を行いました。さらに、アニメーションの歴史や制作方法を紹介した動画を上映するなど、来館者にアニメーション制作への理解を深めていただきました。

展覧会報告

JAM

韮崎大村美術館 学校法人女子美術大学 相互協力協定5周年記念
韮崎大村美術館収蔵作品展 ー女流画家の歩みー

6/19(水) → 7/28(日)

韮崎大村美術館と学校法人女子美術大学の相互協力協定締結5周年を記念し、女流作家のコレクションで知られる韮崎大村美術館の収蔵品の中から、女子美出身者の作品を中心に、女流画家の歩みをご紹介しました。

アジア・ネットワーク・ビヨンド・デザイン
ANBD 2013 相模原展

8/3(土) → 8/10(土)

日本、台湾、中国、韓国の4都市で毎年開催される国際デザイン展。今年度は「未来へ向けたアジア文化遺産」をテーマとした作品が展示されました。シンポジウムも開催され各国の出品作家と交流を深めました。

女子美ガレリアニケ

平成24年度
女子美術大学美術館賞受賞者作品展

4/6(土) → 5/2(木)前期　5/13(月) → 6/8(土)後期

平成24年度女子美術大学美術館賞を受賞した学生9名の見ごたえのある作品を前期5名後期4名に分けて展示しました。

井江春代 はり絵の世界
〜大地の女神・バチャママと動物たち〜

9/3(火) → 9/27(金)

自由選択で作る自分だけのカリキュラム
女子美術大学短期大学部Ⅰ年前期 基礎造形展

7/2(火) → 8/6(火)

本学短期大学部Ⅰ年前期の自由に選択ができる基礎造形の18講座で制作されたみずみずしい学生の作品を展示しました。

歴史資料展示室

佐藤志津と私立女子美術学校再興展

1/16(水) → 7/15(月・祝)

本学菊坂校舎建設、附属高等女学校創立等の偉業を成した初代校主・佐藤志津の生涯と功績を紹介しました。

展覧会予告

JAM

9/6(金) → 10/17(木)

女子美染織コレクション展　Part3
インドネシアの布 ー島々の記憶ー

インドネシアは多くの島々からなり、島ごとに独自の文化が継承され、衣裳にかかわる伝統も異なります。今回はインドネシアで制作された蝋で防染して模様を表す「バティック」と絣織の「イカット」を展示します。

10/24(木) → 10/28(月)

造形さがみ風っ子展

11/9(土) → 12/15(日)

女子美術大学美術館収蔵作品展
四季をめぐる

日本の四季は様々な人々の暮らしを彩るとともに、風土や文化を形作るうえで欠かせない要素のひとつです。本展では、女子美術大学美術館の収蔵品の中から、芹沢銈介のカレンダーなど四季に関連した作品を展示します。

女子美ガレリアニケ

10/11(金) → 10/19(土)

女子美術大学・東京工芸大学・長岡造形大学・多摩美術大学・中国伝媒大学
五大学合同写真展　〇展

10/25(金) → 11/8(金)
※10/27(日) 特別開廊

ポスターにできること。
女子美術大学×電通
人権ポスター学生作品展

11/29(金) → 12/14(土)

平成25年度
女子美術大学・
女子美術大学短期大学部
退職教員記念展

歴史資料展示室

9/11(水) → 3/16(日)

平成25年度収蔵資料展
収蔵資料にみる女子美の歩み
〜私立女子美術学校開校時に設置された学科を中心に〜

収蔵資料により大学史を紹介するとともに、開校時に設置された学科の歴史資料や卒業生作品を紹介します。

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報グループ
監修担当　浅野正博・林規章
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社 ヒーローズ
発行日　2013年9月30日

©2013 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL http://www.joshibi.ac.jp